儒教の「宇宙快感」と「宇宙認識」

小倉紀蔵（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
Kizou OGURA

1959年東京生まれ。東京大学文学部ドイツ文学科卒業。韓国ソウル大学校哲学科博士課程単位取得（東洋哲学専攻）。東海大学外国語教育センター助教授等を経て現職。儒教を中心とした東洋思想を軸に、主に朝鮮半島を対象として研究している。著書に『韓国は一個の哲学である』（講談社学術文庫）、『心で知る、韓国』（岩波現代文庫）、『創造する東アジア』（春秋社）、『朱子学化する日本近代』（藤原書店）ほか多数。

快感と社会

宋代以降の中国に飛んで行ってみよう。

そこには、読書することによって社会的な上昇をすることができた士大夫（したいふ）という階層があった。士大夫はいろいろなことをする人だが、まず最も重要なのは、読書をすることである。

ところでこの士大夫という人びとは、『論語』や『孟子』などを読みながら何を感じ取っていたのか。それは究極の肉体的快感ではなかったかと私は思う。

朝鮮王朝時代の朝鮮も、事情は同じである。いや、そこでは中国よりももっと朱子学の支配が強かったわけだから、儒教の経典に対するフェティシズム的な没入はより度合いが高かったかもしれない。「子曰学而時習之不亦説乎有朋自遠方来不亦楽乎人不知而不慍不亦君子乎」というような漢字の羅列から、かぎりなく恍惚とした肉体的快感を得ることができなくては、朱子学的士大夫の世界観はわからないのである。

南宋時代の士大夫（歴代画幅集冊第一幅より、国立故宮博物院蔵）

ここに、ひとつの光景が浮かび上がる。朝鮮総督府によって記録された、植民地時代の朝鮮のある村でのできごとである。若い女が、突然、髪をかきむしりながら脱兎のごとく家を飛び出てしまう。そして狂ったように道を走りながら、服をすべて脱いでしまう。裸体になった若い女は、道ばたの干し草が積まれてあるところに来ると、その干し草の山の中に飛び込んで、体をかきむしりながらもだえ苦しむ。

これは、朝鮮における入巫過程の記録である。つまり、シャーマンでなかった人間がだしぬけにシャーマンになるいきさつを、記録したものである。それではなぜこのような突然の憑依が、朝鮮の女性には頻繁に起こったのだろうか。

それは、「快感の社会的関係」とは何かということをよくよく考えてみなければわからない。

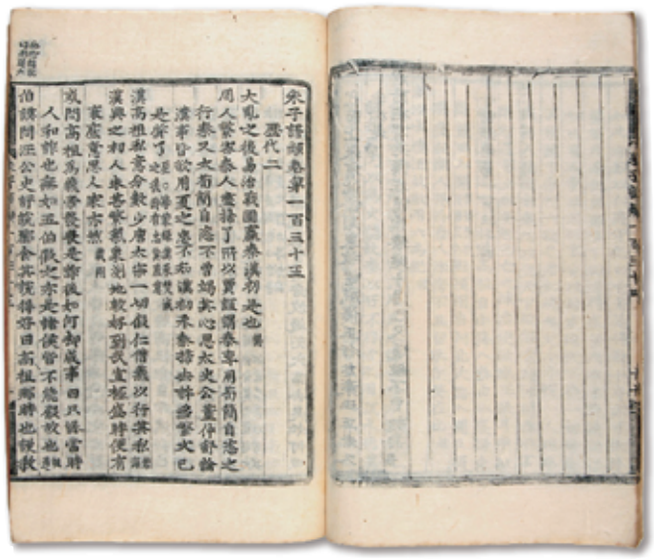
村の快感構造

朝鮮の村の構造は、両班（ヤンバン）という儒教的知識人（支配層）の家と庶民の家々とがひとつの有機体を形成している。そしてこの村のはずれに、シャーマンがいるのである。

村全体は、両班の気によって支配されている。それは儒教的道徳によって方向づけられた気である。仁義礼智という観念（理）が浸透し、秩序は儒教的に整然と保たれていることが理想である。しかし両班の邸宅から離れて村のはずれのほうにゆけば、そこでは非儒教的な気が濃くなってゆく。朝鮮王朝時代には仏教は排斥され、寺院は山中深くに追いやられたので、村には仏教的な気配はほとんどない。非儒教的な気というのは、主に、風水地理などの道教的なものと、儒教からは迷信として蔑まれたシャーマニズム的なものである。

村の儒教的な気は、理を体現している。理とは朱子学の理念・理論・論理・生理・倫理などの総称である。両班の邸宅に近い場所はこの理

朝鮮王朝時代の両班
朝鮮民俗の絵はがきより（山本俊介〈京都・高麗美術館〉蔵）



『朱子語類』　朱子学を大成した南宋の朱子と門人との問答集。
本書は朝鮮で刊行されたもの（国立公文書館蔵）

が発現した気が色濃く漂っている。朱子学的統治とは、統治者が理とほぼ一体化することによってその場の気を支配することである。その支配の根拠は四書五経という儒教経典である。その漢字の羅列の秩序こそが理なのであり、その漢字の秩序がそのまま空間・時間支配の根拠となっているわけだ。

日本人は、ほんとうに「男」が自分たちの快感のみを増幅するような「社会」をつくるとどうなるかを、知らない。それは、日本では中国宋代以後のような朱子学社会が実現したことがなかったからである。江戸時代は儒教社会ではなく封建社会であった。

日本のフェミニストたちが攻撃してきたのは「封建的な家父長制」であるが、これは「男」たちが本当に真剣に自分たちの快感を極大化させようとしてつくったシステムとはいえない。「封建的」なシステムではなく、「儒教的」なシステムこそ、「男」たちの宇宙的快感のためのものなのである。

書物を読むこと、儒教の経典を読むことが、そのまま宇宙大の快感と連結する。そしてその結果として社会的上昇を達成する。宇宙大の理と合体した士大夫は現実社会の支配者となるのである。これこそが、「宇宙快感」との一体化を目指した究極のシステムといえる。

朱子学ではこの「宇宙快感」を「公」と規定した。そして宇宙の理と一体化しない「個人快感」は「私」としてこれを徹底的に蔑視し糾弾した。「宇宙快感」も肉体性のものであるはずなのに、それを「心の理化」と規定して肉体性を極度に隠蔽した。そして「心」以外の肉体を蔑み、「心」以外の肉体が感受する快感はこれを「私」と規定して排除した。

朱子学的支配者とは、四書五経に通暁することによって超越的な「宇宙快感」を体現し、そのパワーをもって村のすみずみまでを統御しようとする者である。

そのような統治者が中心に位置する朝鮮の村では、個人的で私的で情欲的な快楽、すなわち四書五経の漢字と無関係な快楽は、抑圧される。この抑圧システムにおいてもっとも強度の高い圧迫を受けるのは、女性たちである。この圧迫はきわめて強いものだが、実はそこから簡単に逃れ出る方法はあるし、実際、村の庶民層の女たちのほとんどはその方法で逃れ出ているのだ。それは、両班の「宇宙快感」を無視することである。つまり、理から逸脱して「情としての気」そのものに生きることである。それゆえ、朝鮮の村では川辺で洗濯したり農作業をしたりしながら、女たちは快活に笑い、露骨に性的な冗談に興じ、生命力ゆたかに生きていた。それは被抑圧者とは思えぬほど底抜けに明るくて力強く、かつ快楽的な情景であった。

しかし、それらの女たちの中に、変わり者がいる。この女は、両班たちの理から逸脱した奔放な情の世界に遊ぶことを毛嫌いしている。思い詰めたような表情で、畦や橋を歩いている。多情で明朗な女たちは川で洗濯をしながら「マルブンはおかしいよ」などと噂話をしている。マルブンという名の女の表情はどんどん鋭くなる。まるで天の霊に憧れるかのように放心状態で上空を見ている。女たちは「見ててごらん、マルブンはきっと狂うよ」とひそひそ語る。そんなある日、マルブンはだしぬけ

韓国のクッ　長寿と招福を祈願し、巫楽に合わせて激しく巫舞をする巫女（加藤敬写真・文『万神――韓国のシャーマニズム』平河出版社より）

に、脱兎のごとく走り出して畑の脇で素っ裸になったり、山にはいって鏡や銀刀を探したりという不可解な行動をとるのだ。このようにしてマルブンはシャーマンとなる。

彼女は、天の理を両班という身分の男がひとりじめすることを許さない女である。儒教の天理とは異なる、もうひとつの天のことわりがあることを、シャーマンとして実践するのだ。それは「もうひとつの宇宙快感」である。四書五経にもとづく理ではなく、天の神霊を直接自分の身体に受け入れることによって、雷電に打たれて卒倒するかのような劇的快楽を実践するのである。

朝鮮の儒教的システムにおいてシャーマンは「賤民」にカテゴライズされ、村人たちから極度に蔑視される。だが村の「快活な」女たちは、その快活性の裏側に実は抑圧された行き場のない黒い感情（これを恨（ハン）という）を持っており、その解放を希ってシャーマンのもとに通うのである。そこで口寄せの先祖の声を聞き、激烈なダンスの巫儀（クッという）に参加して、泣きながら黒い感情を解放させる。不浄視されたマルブンのところには、村の女たちが集うようになる。

かくして朝鮮の村は、両班とそれを取り囲む男たちの「宇宙快感」の磁場と、シャーマンとそれを取り囲む女たちの「天霊快感」の磁場とにきれいに分離するのである。

鬼神的統治

両班とシャーマンに共通しているものがいくつかあるが、そのひとつが「鬼神」である。

私としては、朱子学的世界観を理解するために、鬼神ほど重要なものはないように思える。鬼神が重要である理由は、『中庸』第十六章の次の一節にある。

「視之而弗見。聴之而弗聞。体物而不可遺」

（鬼神は）之を視れども見えず、之を聴けども聞こえず、物に体して遺す可からず。

極端にいえば、この世界観を体得できるか否かが、朱子学を理解できるか否かに直結している。

そう、朱子学的社会とは、鬼神が充満し、「物に体する（体物）」時空間なのである。「物に体する」というのは、その物をその物たらしめている根本となっているという意味である。

鬼神は民衆の世界においては、日本語の「おにがみ」のように、具体的なお化けや幽霊、もののけなどを意味する。朝鮮シャーマニズムにおいても、基本は同様である。

ところが朱子学ではこれを、自然哲学（子安）的に解釈するのである（朱子学の鬼神に関しては、子安宣邦の優れた論考『鬼神論』、福武書店、1992がある）。

さて、それでは実際の朱子学社会においては、鬼神はどのように存在し、どのように規定されたのであろうか。

儒教の鬼神論は、基本的にエネルギーあるいは場の観念で成り立っている。「神」や「鬼」という実体があるわけではない。気の霊的なエネルギーの様態に、「神」「鬼」という名をつけているだけなのである。

しかしそれならどうして、神の領域と鬼の領域を統治上で二分できるのか。それは士大夫の領域と民衆の領域という分割であるのか。もしエネルギーの状態、様態であるならば、境界は可動的で流動的であるはずだ。

ここに、統治の言説が登場する。

統治はどのようにしなければならないのか、という問いである。

つまりそれは、「鬼神的」にしなくてはならないのだ。

「宇宙認識」と統治

『中庸』第一章の「君子は慎独する（ひとりをつつしむ）」というのは、どういうことであろうか。

君子は鬼神に動かされてはならない。君子は鬼神をコントロールする存在である。

つまり陰陽をコントロールする。人工的にする、というよりは、陰陽とひとつになって、それを心によって統御するのである。

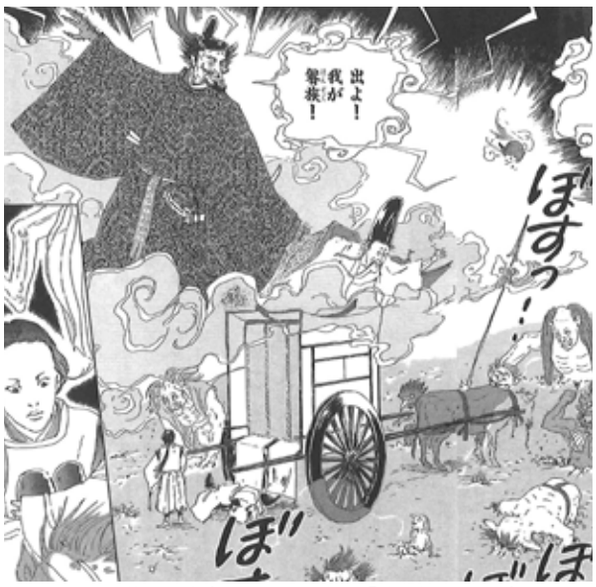
士大夫は、何がわれわれの管轄なのか、に対して敏感である。弟子たちは朱子にそのことを質問している。何が理で何が理でないのか、という質問である。それで朱子は怪異現象などを問答の際に盛んに取りあげている。

朱子の答えはこうだ。すべては理である。どんな怪異現象も、理でないものはない（『朱子語類』巻三・十九）。ただしそれは、怪異現象もありうるという理なのであって、士大夫はそのことさえ理解すれば、個々の怪異現象に関与することはしなくてよい。個々の具体的な怪異現象は、ほかの人たち（民衆）の管轄なのだ。だから民衆にまかせるがよい。士大夫はそこには関わらない。

中国や朝鮮では、士大夫が怪異現象には関わらなかった。それらは淫祠や道教、シャーマニズムの管轄であった。知識人はそれを破壊せず、ほうっておいた。親より先に死んだ子や、理不尽な死に方をした人は、儒教側では祀れないから、そういう領域を確保しておかねばならなかったのだ。だから士大夫は村を歩きながら、一部始終を見ていた。観察していた。いま、どういう現象が村で起きているか、それを理気論的に解釈していた。すばらしい観察者であった。何もしなかったのではない。無為徒食ではない。そして士大夫の管轄の領域と、民衆の領域とをはっきりと分けた。村の構造がそうなっている。そしてその観察がすなわち統治であった。

士大夫には、すぐれた認識能力がある。それを「二気の良能」という。この良能は、単に霊妙に作用するという意味ではない。人間の認識能力のこともいっている。いったい士大夫はどこまで認識できるのか。つまりこれはデカルト的な、あるいはカント、ヘーゲル的な問いなのだ。認識の限界を問うているのである。それが鬼神論なのだ。そしてこの鬼神的認識能力がすなわち統治能力なのである。

これは格物致知（ひとつひとつの物の理を漸進的に考究すること）から豁然貫通（多様な理を蓄積していって、あるとき突然すべてを統合するひとつの理を把握すること）という回路を経て、「宇宙認識」に至る道である。窮理や敬など、この認識のための身心変容技法はきわめて発達している。



怨霊となった菅原道真（岡野玲子・夢枕獏『陰陽師１』より）
ⓒ岡野玲子・夢枕獏／白泉社（メロディ）

日本は朱子学社会ではなかったから、このような「宇宙認識」という世界観はなかなか理解できない。しかし、儒教の影響を受けた神道などでは、これに近いことをいっている。また、民衆レベルでも、「宇宙認識」の途方もないパワーに関して畏怖を抱いた事例がないわけではない。

たとえば、なぜ平安京の人びとは菅原道真の怨霊にあれほど怯えたのか。ただ単に道真の怨みの念の強さに怯えただけだったのだろうか。それなら、ほかにも怨みの念を持って死んだ霊は無数といってよいほどたくさんいただろうに、なぜ道真が特に恐ろしかったのであろうか。それは、菅原道真の「全知」性に対する畏怖ではなかったか。

つまり、菅原道真の霊魂（精神）の全知性は「宇宙認識者」的な存在として人びとから把えられていたのではないか。日本のカミの伝統からは明白に逸脱する異端的霊魂として、菅原道真は特権的な地位を占めることができた。この異端性に人びとは、何かただならぬ「宇宙認識」的なものを感じ取っていたのに違いない。八百万のカミとは明らかに異なる、宇宙のすべてを知りうる超常的な能力の具現者として、日本人は菅原道真を天皇やカミとは異なるもうひとりの異能者として認めた。そしてその者は藤原氏という権力者によって無惨にも都から遠ざけられ、怨み死にした。すなわちこの全知者は、全能者ではなかったのである。そしてこの魂の死とともに、彼の全知（宇宙認識）はどこに消えたのだろうかという問いが生じる。超常的な全知性であるがゆえに、それは春になると雪が融けるようには消え去りはしなかったであろう。このomniscience（全知）は、omnipresence（遍在）という形をとらずに、東洋の伝統的な鬼神観に則って、何らかの凝固性つまり偏在性をともなって雪冤のために都まで一気に飛来し、そこで何らかの能動性を発揮する。ここに、鬼神観と霊魂観の合体という現象が起こる。つまり、単に怨みを抱いて死んだ魂ではなく、怨みを抱いて死んだ全知の霊として、菅原道真は日本史上に特異な位置を占めることになったのである。

菅原道真の「宇宙認識」の方向性を突き進めていけば、その後の日本社会はまったく異なる姿になったにちがいない。しかし日本ではその後、「宇宙認識」の体得程度をテストする科挙という試験システムは、実現されなかったのである。